

世界のソーシャル・ビジネス

スリランカ
コロンボBOP層向け学習塾
月390円で学力向上

オンライン学習教材を提供するすららネット（東京・千代田）は「世界の教育格差の根絶」を目指し、スリランカでBOP層の子どもたちを対象にした学習塾を展開している。2015年5月以来、6校を開校し、生徒数は400人を超えた。月謝が約390円という低価格で、教師の質に左右されないオンライン学習システムは、スリランカでも学力向上の成果を上げている。

（オルタナ副編集長・吉田 広子）



コロンボでSurala Jukuに通う生徒。パソコンを使って算数を学ぶ

「子どもが家に帰ると、塾のことを嬉しそうに話す。本当に楽しく学んでいるようだ」

スリランカ・コロンボ市の塾に通う生徒の保護者は、こ

う感想を寄せた。スリランカをはじめ途上国では、学校の建設が進み就学率が上がる一方、教師の育成が追い付かず、教育の質が問題になっている。

そこで、期待されているのが、すららネットのオンライン学習システムだ。同社は2008年の創業以来「ゲームフィクション」（ゲームの要素を取り入れること）を応用したオンライン学習教材「すらら」を国内の小・中学生、高校生向けに提供してきた。

ゲーム感覚で楽しく学べるだけでなく、個人の理解度に合わせた反復演習が可能で、特に低学力生徒の学力向上で成果を上げてきた。国内の受講者数は3万人以上に上る。

すららネットの湯野川孝彦社長は「日本でも途上国でも、できない子は置いてけぼりになってしまいがちだ。一度、授業についていけなくなると、

追い付くのが難しい。途上国の発展にとって、教育は最も重要な課題の1つ。『すらら』で、世界の教育格差をなくしていきたい」と意気込む。

先生役の「忍者」が問いかけ

同社がスリランカで提供しているのは、基礎計算力を高める小学生向けのオンライン学習教材だ。子どもの集中力が続くように、1単元を15分程度に短くし、先生役の忍者のキャラクターが現地語のシンハラ語で問いかけ、子どもたちは問題に答えていく。

開校当初、ほとんど計算ができない子どもたちが14%いたが、いまではゼロになり、足し算の成績も25・4%向上した。保護者からは、挨拶や手洗いといった日本流の「しつけ」を学べる点も評価されているという。

先生の代わりに、生徒をサポートするのがファシリテーターだ。BOP層の女性たちが採用されている。

湯野川社長は「オンライン教材のため利益率は高く、

ファシリテーターは教務以外の塾の運営や子どものモチベーションに注力できるのもビジネス上の利点」と説明する。スリランカの平均月収は約2万円。Surala Jukuの月謝は500スリランカ・ルピー（約390円）で、負担の少ない価格に設定されている。すららネットはスリランカで、2017年末までに100教室、生徒数1万人を目標としている。

「アジア全体ではまだまだ多くの子どもたちが、貧困や距離などが理由で、公教育を受けられていない。オンライン教材で教育の質を担保し、教師の教務力に依存しないやり方で全体の底上げをしていきたい」（湯野川社長）



すららネットの湯野川孝彦社長